

Kawasaki 美術館
金山平三の世界



《無題（円塚山・だんまり）》 制作年不詳 22.9×30.2cm 油彩・紙 兵庫県立美術館蔵

幼時の記憶を基に描かれた
《芝居絵》シリーズの一作

一九二八（昭和三年）九月、明治神宮聖徳記念絵画館のための壁画大作《日清役平壤戦》を制作中の金山は大病を患った。手術によって何とか一命をとりとめたものの、体力の必要な屋外での制作はままならず、ふと思いついて描き始めたのが、幼い頃の神戸での記憶に基づいた、二連の《芝居絵》シリーズの作品である。それは藤島武二をはじめとする一部の画家仲間のほかにはほとんど人目に触れることもなく描きためられ、一九六〇（昭和三五）年に日本橋高島屋で開催された「金山平三芝居絵と近作展」にて初めて一般に公開された。

この作品の主題となつているのは、「南総里見八犬伝」のうち「円塚山の場」にて、犬山道節と犬川莊助が「だんまり」と称する暗闇の中死闘を繰り広げる情景であり、セリなどの舞台装置まで余すことなく、的確な描写力で表現している。

金山は実景に基づく風景画の巨匠としての側面が強調されがちであるが、《芝居絵》の存在は、金山がむしろ構図などを入念に構想し練り上げるタイプの画家であるとともに、自身の踊りの写真に代表される、人体の動きに対するその独得の感覚をも明らかにしている。

（兵庫県立美術館学芸員
相良周作）

金山平三と川崎重工



金山平三画伯は、1883年（明治16年）神戸に生まれ、1964年（昭和39年）80歳で生涯を終えました。1909年（明治42年）東京美術学校（現在の東京芸術大学）を首席で卒業した後、欧州各地で制作を重ね、1916年（大正5年）には、第10回文展に出品した作品が特選第二席になりました。生涯にわたって旺盛な創作活動を続け、自然風土を相手に多くの名画を残し、その業績は近代洋画史上に燦然と輝いています。

川崎重工は第11回文展に出品された「造船所」が縁となり、その後、交流を深めました。画伯の晩年には、自選作品138点の永久保管の依頼を受け、その作品を預かるほどでした。後になり川崎重工は、一部の作品を残して、兵庫県立近代美術館（現・兵庫県立美術館）にすべて寄贈しました。